

博 士 論 文 概 要

論 文 題 目

阮朝勤政殿の平面・断面計画に関する復原的研究

Reconstruction study on the Plan and Section of the
‘Can Chanh Dien’ main palace of the Nguyen dynasty

申 請 者

レ・ヴィン・アン

L E V i n h A n

建築学専攻・建築史研究

2009 年 2 月

本論文は、ベトナム・フエ阮朝王宮の勤政殿の平面・断面計画に関する復原的研究である。勤政殿は 1804 年に創建され、阮朝時代（1802-1945）には歴代皇帝及び朝廷が政務を行う「常朝正殿」であった。1947 年に木造架構と屋根が完全に焼失し、現在は基壇のみが残されている。本論文は、フエに残される阮朝王宮の建築遺構群を分析の対象とし、主にそれらの実測調査の成果に基づいて、勤政殿の平面・断面計画の復原を目指すものである。この研究を通して、勤政殿の失われた木造架構について基礎的な寸法計画が明らかになると同時に、フエの宮殿建築群の設計方法の特質が明らかになることは、フエの建造物群の保存修復事業においてとりわけ重要な意義を持つだろう。

本論文では主に以下の 3 つの方法に基づいて考察を進めた。1) 歴史資料の整理：阮朝国史館の漢喃史料、仏文資料、20 世紀前半に撮影された白黒写真等に基づいて、勤政殿の創建・改変・規模・形式等の整理を進める。2) 保存修復資料の読解：現地の修復記録を参考にして、宮殿建築の基壇に関する建設技術、構造形式、材料を整理する。3) 勤政殿基壇と現存遺構の実測調査データの分析：勤政殿基壇を初めとする各宮殿遺構の寸法計画を分析し、勤政殿基壇の構造・寸法計画、現存遺構の平面・断面の設計方法を考察する。以上の 3 点に加えて、現地の大工棟梁への聞き取り調査に基づいた伝統木造建築の設計方法を適宜参照した。以上の分析を総合し、勤政殿の平面・梁行断面の寸法計画の復原考察を行う。

本論文は序論、本論、結論から成り、序論は研究概要として目的と方法、既往の研究、研究の背景として阮朝の宮殿建築に関する歴史や木造架構の特徴について概要を整理した。本論は 4 章から成り、第 1 章では漢喃史料や仏文資料、白黒写真を基に勤政殿の創建年代、建築規模・形式、改変・修復履歴を整理した。第 2 章では現地に残された勤政殿基壇の詳細な実測調査に基づいて、基壇の構造、各部形式、寸法計画を整理し、阮朝後期の基壇床面の改変を推定した。第 3 章では実測調査の分析結果と伝統的大工からの聞き取り調査に基づいて、各宮殿建築の柱間・梁行断面の設計方法を推定し、宮殿の設計方法を大きく二種類に整理した。第 4 章では、現存遺構から推定した設計方法から勤政殿基壇の柱間寸法を再検証し、勤政殿の平面・梁行断面計画の復原を行った。結論では本論文で考察された結果を整理し、まとめとした。

本論第 1 章では、歴史資料と白黒写真を基に勤政殿について以下の情報を整理した。勤政殿は、紫禁城の正殿のひとつと位置づけられ、皇城の主軸に南から午門、太和殿、大宮門と続き、その後方北側に置かれる。紫禁城の中央は乾成宮と坤泰宮の二宮を以て構成され、大宮門を乾成宮の正門とした。勤政殿と左右廡を品字型に配置し、左右翼廊とともに扈庭を置き構成される。また文明殿、武顯殿が勤政殿の東西に配置される。勤政殿は嘉隆 3 年（1804）に創建され、阮朝の歴代皇帝及び朝廷が政務を行う「常朝正殿」であった。明命期・嗣徳期・同慶期には幾つかの「重修」・「修補」・「整理」・「修飾」を行ったことが文献記述に認めら

れる．成泰 11 年（1899）には基壇の床を洋式の装飾床タイルに改変した．啓定 8 年（1923）の重修の際には，木造軸部を黒塗りから朱塗りにしたことが確認できる．第一次インドシナ戦争中の 1947 年に木造架構が完全に焼失し，基壇のみが現存している．勤政殿の建物形式は二棟連棟式を採り前殿と正殿に分節される．前殿桁行は「七間」，正殿桁行は「五間」，左右側は「東西両廂」とする．基壇は「基高二尺三寸」，基壇東西南北面にある階段は「南三陸陸五級北二陸東西各一陸陸二級」との記述がある．木造架構は「重梁」と「承檼」で構成され，屋根は側廻りを少し下げ下屋根とし，ビワ壁「重簷」を設け，葺材は「黄琉璃瓦」，上部装飾は「龍吻」・「珽藍料壺」とある．文献その他の記録から見る限り，創建以来その位置や規模に大きな変更があったとは考えられず，その木造架構は阮朝の最後まで当初のものを保っていたと考えられる．

本論第 2 章では，勤政殿基壇の詳細調査に基づいて各部寸法や痕跡を精査し，成泰 11 年と啓定 8 年の改変について具体像を推定した．勤政殿基壇表層のモルタル層の厚さは，装飾床タイルの厚さ 20mm を加えると，合計 84mm の厚さとなる．これは礎石高さが葛石高さより 89mm 低いことと一致している．そこで現在の基壇床面は，成泰 11 年に装飾床タイル敷きとした際の床面と考えられ，礎石高さはそれ以前の床面の層と一致すると考えられる．一部に残るバッチャン甄といくつかの痕跡を考慮すると，創建当初の嘉隆期の基壇の仕上げはバッチャン甄敷きであったと考えられる．現存している礎石高さ及び葛石高さは創建当初の位置と考えられ，基壇中央の床面の高さが葛石の高さより 89mm 低く，基壇の側廻りの高さを上げる手法と解釈できる．成泰 11 年に重修「改列花磚」の際には，大半の床仕上げのバッチャン甄を取り外し，約 80 ～ 90mm 高さを上げ，床面が平滑な表面になるように改変して，初めて装飾タイル敷きを行った．檐柱筋の礎石の上面（1 通，10 通，A 通）が装飾タイルの厚さ（20mm）とほぼ同じ厚さで切り欠かれており，こうした床敷きの手法は東北の廻廊（H27）にある作り出しの仕上げの礎石と同じ手法と推定できる．続いて啓定 8 年には装飾タイルを取り替え，礎盤の付加を行った．礎盤を礎石上面に置くため，檐柱筋の礎石の上面（1 通，10 通，A 通）の高さを約 80 ～ 90mm 低く削り，粗面仕上げへ改変したと考えられる．これらの考察は，檐柱筋の礎石（南・東・西）の上面が粗面であること，南面の基壇外装材の高さは文献記述とほぼ同じであること，礎石高さが床面の高さや葛石の高さより低い状態であることの 3 点に基づいている．

本論第 3 章では，計 14 棟の遺構に関する実測調査結果に基づいて分析を進めた．結果としてフエの殿舎の平面の設計方法は大きく以下の 2 つの方法が推定される．第一に宮殿に見られる方法．この方法では，第一指定寸法が尺の実寸値にて正中間振心か正殿梁心で指定される．指定された寸法は柱元か大梁の位置において用いられ，柱元での柱間寸法は転び幅を加えたものとなる．続いて次間振心を正中間振心から尺寸を減じて指定し，更に前殿梁心は次間振心と等しいか，尺

寸を加減した寸法と等しくする。内廂は次間振心から派生し、外廂も内廂から派生すると考えられる。最後に、傾の間と前後廂は順に内廂・外廂と同断とする。第二に廟殿と寢殿に見られる方法。この方法では、第一指定寸法は正中間振心を指定し、次間振心は正中間振心に基づいて決定される。次に正殿梁心は次間振心と等しいが寸法を加減した寸法とする。前殿梁心は正殿梁心から決定される。最後に内廂は次間振心より、外廂は内廂より決定され、傾の間と前後廂はこれらの寸法を同寸でとる。次に梁行断面の設計方法について、以下の 2 つの方法が推定される。第①案は嘉隆期の設計方法であり、第一段階として平面から下屋根上端の高さ（正中間振心か次間振心の寸法と等しい）を取り、建物の下部の範囲を決める。桁行の規模に応じて下屋根上端上より古檐壁の成を採ると梁行部材高さの設計基準線の高さが決められる。第二段階として梁行部材高さの設計基準線上に各柱間寸法を割り当て、転びの基準線として垂線を降ろす。正殿中柱の高さは梁行部材高さの設計基準線の高さと等しく設定され、前殿大柱の高さはその上に頭貫ひとつ分の成を足した高さとなる。梁行部材高さの設計基準線は正殿ではムック・チェン、前殿ではムック・ロンとなる。下屋根上端の高さの 2 倍が建物全体の高さとなる。ここで柱元の位置が決められる。第三段階として中柱心と梁行部材高さの設計基準線との交点から腋尺を用いて、建物全体の高さの範囲内で正殿上屋根の勾配が決められる。下屋根勾配は正殿上屋根の隅の勾配と等しく、前殿上屋根勾配は前殿大梁と桁母屋の高さ関係による発生される。第②案は嘉隆期以後の設計方法と考えられ、第一段階として梁行部材高さの設計基準線の高さが官木尺（宮殿・廟殿）か魯班尺（寢殿）で仮に決められ、各柱間寸法を割り当て、転びの基準線として垂線を降ろす。第二段階として正殿中柱の高さは梁行部材高さの設計基準線の高さと等しく設定され、前殿大柱の高さはその上に頭貫ひとつ分の成を足した高さとなる。梁行部材高さの設計基準線は正殿ではムック・チェン、前殿ではムック・ロンとなる。正殿の上屋根勾配が中柱心と梁行部材高さの設計基準線との交点から腋尺によって決められ、そこから正殿棟木下端の理想的高さが見出される。下屋根勾配は正殿上屋根の隅の勾配と等しく、前殿上屋根勾配は前殿大梁と桁母屋の高さ関係による発生される。梁行部材高さの設計基準線の下に桁行規模によって決められた古檐壁の成を取ると下屋根上端の高さと正殿天井梁の高さが見出される。第三段階として下屋根上端から正殿棟木上端までの高さと下屋根上端下より床面か正殿床板までの高さを等しく取り、正殿棟木上か下端の高さが下屋根上端高さの 2 倍となるように調整する。ここで柱元の位置が決められ、梁行部材高さの設計基準線より床面までの高さが決定され、各柱の高さも同様に最後に決定される。

以上の分析に基づき、本論第 4 章では、勤政殿が太和殿と平面寸法計画、木造架構、建築規模を同じくする点、嘉隆期創建である点を重視し、一部写真測量の成果も合わせて踏まえ、勤政殿の平面・断面計画の復原案を提示した。